記　入　日　2014 年　01 月　17 日

１．概　要

実践団体名	みどりが丘小学校学校支援委員会環境整備部		
連絡先	鈴木　介人　０９０－３００３－９６７７		
プランタイトル	みどりが丘小学校サバイバルキャンプ		
プランの対象者※1	小学生（低学年・高学年）教職員・保護者・地域住民・高齢者・防災関係者	**対象とする災害種別**※2	地震

※1　別紙「記入上の留意点」の1．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※2　別紙「記入上の留意点」の2．項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

昨年からの継続していくことによって成果を出していきたいと今回も参加することになりました。子ども中心のキャンプづくりから、地域も巻き込んで進めいくことで、街の防災力を強化するとともに、学校を中心としたチームづくりをしていった。企画が二回目ということがあって、防災に担う人材が徐々に増えるとともに、自分たちで考えることも必要との認識が広まりを進めていった。近隣連携として千葉県立八千代特別支援学校との交流を進められるきっかけとなりました。

【プランの概要】

前半は、一泊のサバイバルキャンプを通しての地域・学校の関係を強化してくとともに、自分自身での防災力の向上を目指して行った。特に、防災倉庫の備品を積極的に使用するなど、有事に備えて、一般人が利用できる体制が整ってきた。

後半は、キャンプの経験から子どもたちに対しては、災害時の弱者児への配慮を考えるとして、特別支援学校との交流を行った。この交流をとおして、コミュニケーション能力を向上させて、もしもの時に発揮できるようにしたい。一般では、子どもたちの交流事業と、特別支援学校との連携強化として、自閉症の子供向け避難所コミュニケーションツールを開発することになった。また、２月には、千葉県の防災キャンプフォーラム開催に至った。

【期待される効果・ここがおすすめ！】

一泊のキャンプをするだけで、自助・共助の仕組みがわかってきます。また、学校力の強化にも結び付けることが可能です。地域・家庭・学校と共に防災・減災を進めていくことに最適な企画だと思います。また、学校を中心とした身近な地域との取組になります。

災害弱者児に対するコミュニケーションツールは、一般的な避難所において発生するであろう対応において、困らないように開発していますので、今後一般避難所に配置することが望ましいと考えています。幅広く考えれば、外国人向けにも作成が充分可能ではないかと考えられます。

２．プランの年間活動記録（20　　年）

	プランの立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	プラン提案	プラン概要検討会議	学校・学校支援委員会・市とのプランについて検討会議
5 月	全体会議① 防災キッズ隊募集	実施プランの全体会議 参加について募集	学校・委員会・市・自治会
6 月	全体会議② 防災キッズ隊会議	プラン詳細確認会議 キッズ隊の編成及び問題提起	全体会議①にボランティア団体が参加して、メニューの増加検討
7 月	全体会議③ 防災キッズ隊課題	プランについて予行確認・キッズ隊課題への取組、詳細打合せ	プラン確認・有明（そなえりあ）への見学活動・キッズ隊は、隊長にチーム作りから係決め
8 月	防災サバイバルキャンプ実施	3.4 日に実施、日帰り 140 名宿泊 120 名参加	学校・親子・地域・自治会・社会福祉協議会が参加し、（幅広い年齢層）
9 月	中間発表取りまとめ会議	キャンプ結果からの講評	キャンプ内容について取りまとめ
10 月	地域防災訓練実施 防災教育プラン中間発表	学校を会場とした、５０名による防災訓練と、キャンプＰＲ	自治会主催の防災訓練会場となり、広報活動を行う。
11 月	八千代緑が丘駅での地域連合訓練	隣接小・警察も入っての活動	隣接（新木戸小）も参加して、防災焚きだしから、消火訓練を駅前にて実施
12 月	コミュニケーションツール開発・避難所ツール開発	特別支援学校から災害向けツールについて	自閉症の児童が避難した場合のコミュニケーションをとるためツールを開発することにする。
1 月	コミュニケーションツール検討会議	特別支援学校の村上北小学校より意見聴取	コミュニケーションツールを開発して、意見を聞き再度改良をする。
2 月	防災教育チャレンジプラン最終発表	子ども・先生によるプレゼン	一般講評
3 月	来年に向けて日程調整会議	学校・支援委員会	

３．実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：０１】※3

タイトル	防災サバイバルキャンプ
実施月日（曜日）	８月３．４日
実施場所	八千代市市立みどが丘小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：みどりが丘小学校学校支援委員会 氏　　名：鈴木　介人 所属・役職等：環境整備部　代表
所要時間または「コマ数×単位時間」	３日１２時～４日１０時まで
プログラムのカテゴリ、形式※4	1　イベント・行事（防災体験）
活動目的※5	3　災害に強い地域をつくる
達成目標	住民中心（親子）の避難所設営が可能になるようにする。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	子ども中心の防災キッズ隊を編成して、まず子どもに役割や責任を持たせることにました。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	市・消防署・ボランティア組織 防災倉庫内備品・ボランティア組織からの手動用発電機・ソーラークッカー・キャンドル関連
参加人数	１２０名
経費の総額･内訳概要	８万円程度　体験企画用の材料道具　キャンドル　食料
成果と課題	【成果】地域・親子・学校との連携をすることで、人との共助を学ぶことができる。また、子どもを積極的に動かす事で、大人も自然と動いてきます。 【課題】各エリア（自治会）担当者が、高齢というのもあり、自治会側も学校の依存することもあり、各人での備えをどう取り組むかが課題となる。
成果物	サバイバルキャンププログラム

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：０２】※3

タイトル	災害時弱者児コミュニケーションツール
実施月日（曜日）	１月９日
実施場所	千葉県立八千代特別支援学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：堀子　榮 所属・役職等：学校長
所要時間または「コマ数×単位時間」	作成　１２時間　検討会議　１時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	12　研究
活動目的※5	2　防災に役立つ資料・材料作り
達成目標	災害時の弱者児とのコミュニケーションを補助するため
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	学校で実際使われているシンボルマークを利用していく。 避難所を想定した場合に必要とさせることを考える。 マークを利用したツールを作成する。 特別支援学校の先生から検討チェックを受ける。 再度、修正して、完成させる。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	特別支援学校の先生・避難所での運営に携わったメンバー 紙・ペン・パソコン
参加人数	８名
経費の総額･内訳概要	４０００円程度
成果と課題	【成果】災害時の障害者をもった子どもたちとのコミュニケーションをどうやったらよいのかを考えた場合に、このようなツールがあることが安心にわかりやすくとれると思っています。 【課題】災害時弱者児以外にも外国人などの場合のツール作成をあると便利ではないかと考えられる。
成果物	災害弱者児童向けコミュニケーションツール

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：＿＿＿＿】※3

タイトル	
実施月日（曜日）	
実施場所	
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏　　名： 所属・役職等：
所要時間または 「コマ数×単位時間」	
プログラムの カテゴリ、形式※4	
活動目的※5	
達成目標	
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	
参加人数	
経費の総額・内訳概要	
成果と課題	【成果】 【課題】
成果物	

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

４．苦労した点・工夫した点

プランの立案と調整で苦労した点工夫した点	前半メインであった、キャンプでは前回の経験もあったため、どのように掘り下げていくか？新鮮な企画が維持できるかなどがあった。そのため、新たな企画を作ることに対して苦労をした。自分で、できることは何か？ということで、様々な機関（環境部署）にお願いして、サバイバル的なものがどのようなことができるか？ということでアイディアを探していった。 また、子どもたちにも学んだことが後日活かせるようにしていくための工夫が必要だと感じました。 プラン作成については、最初に全体会議でプラン概要を告知したことで、全体が大まかに把握できたため、早くにプランが掴めたとの関係者の意見だった。前回は、全体会議に至るまでが時間がかかった。
準備活動で苦労した点工夫した点	体験企画の打合せについては、当初予定していたものが、小学生対象ではハードルが高いなどの障害もあったため。全体会議では修正を加えたりしたものがあった。逆に言えば、全体会議であったため、修正ができたともいえます。 小学生に対しては、避難所の性格上と、意味があるキャンプにするために、学校側からは、縦割りにしたチーム作りを行った。しかし、１～６年生の縦割りには苦労があって、低学年がなかなか話がまとまらないなどの問題が多々あった。 障害児に対するツール開発にあたっては、当初は、一般的なユニバーサルデザインを採用するつもりで、避難所での必要なマークを作成していたが、特別支援学校側からの意見交換において、普段使いなれたものが一番いいということで、特別支援学校で良く採用されている。「ドロップス」を使用することで、役立てることになった。
実践に当たって苦労した点工夫した点	また、当日の体験企画を行うスタッフなどの人集めにも苦労した。そのため今回は、ボランティア組織とも連携し参加を頂いたことで、企画プログラムの運営を行うことができた。人材資源が豊富にあることで、色々なものが体験できると思うので、今後の人材育成が鍵になると感じています。 中間発表後の計画をどうするかは、キャンプでの成果によって、考える予定でしたので、思案しました。今回は、特別支援学校からの参加もあったので、それを糸口に進めていくことにしました。また、学校でも障害児との交流を進めることになって、私もその場に携わったり、特別支援学校の授業参観をすることで何が必要なのかを見出だしました。その意味では、外部との連携がこのような形になっていくとは、驚きました。

５．他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・同窓会組織	八千代市みどりが丘小学校 八千代市市立村上北小学校 八千代市教育委員会 千葉県立八千代特別支援学校	教職員派遣・プラグラム参加 教育長による視察 先生のキャンプ参加と、コミュニケーションツールの開発へのアドバイス
保護者・ＰＴＡの組織	保護者会	参加、名簿作成
地域組織	緑が丘自治会 はぐみの杜自治会 自主防災隊 八千代市社会福祉協議会緑が丘支会	参加
国・地方公共団体・公共施設	八千代市総合防災課 八千代消防署 民生委員 千葉県環境政策課	全体会議・プログラム作成及び参加 ボランティア組織へのアイディア提案（千葉県）
企業・産業関連の組合等	㈱サイサン コープみらい ミサワホーム	プログラムへのノウハウ提供 ガス提供・クイズ企画への参加・高齢者体験へのモデルを作成
ボランティア団体・ＮＰＯ法人・ＮＧＯ等	ストップ地球温暖化	電気ガスが使えない場合の様々なアイディア提案（発電・ソーラークッカー）
職業、職能団体・学術組織、学会等		

６．成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として得たこと	継続した取組によって、防災へのソフト面が高まっていくことになった。特に、防災機器の操作設営などが一般の人でも設営できるようになってきた。防災というと、身近でありそうだけど、実際は遠い存在ではあったが、このような取り組みによって成長することができます。常に単純ではありますが、「繰り返し・繰り返し」行うことが熟練度を上げると共に、常に大事だと思います。 また、継続した企画を続けることで、反省点を活かしていけることになりましたし、地域との広がりをつかめました。 特別支援学校からの助言によって、開発した災害時弱者児に対するコミュニケーションツールができことも特筆に値すると思います。
全体の反省・感想・課題	参加者が昨年よりもやや増加したものしたものの、児童の割合は、15%でさらに街の広範囲に参加を求めるためには、色々なＰＲとバックアップが必要だと思っています。この活動を継続することによって、防災対策への考え方に対する、芽が出てくるようにしていきたいと思っています。 子どもたちをどう動かしていくは、特に低学年の子どもたちが、このような災害時において、確実に身を守る行動をとれるのかに対する、啓蒙活動がまだまだ足りないと考えています。地震に対する軽視している場合もあり、恐ろしい災害に対する取り組みを教えるべきかと考えます。
今後の継続予定	八月には、防災キャンプを行う予定である。夏の恒例行事になっていくことと、継続することで、ソフトパワーの蓄積にもつながり、街の一つのキャッチコピーになると思います。「私達の街は、安心・安全に取り組みます」という、前向きな目標になっていくことになります。

７．自由記述欄　※6

※6　自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守でお願いします。

【災害時弱者児童対策ツールについて】

災害においては、高齢者や怪我人が弱者としての取り扱いがクローズアップされがちであったが、私達のみどりが丘小学校においては、近隣校が特別支援学校であったために、交流を進めていくことで、あまりスポットがあたらなかった、障害児についての対応を考えていくことになった。

これは、特別支援学校においては、現在のところ県立校であるために、防災設備があまり設置されておらず、災害時においては　「みどりが丘小学校」に避難することになること確実視されていたため、対策としたいと感じていった。

まず、特別支援学校に通う生徒を知らなくてならないと感じて、授業参観をさせて頂くと共に、通う学校の保護者からの意見を聞く機会を得られた。保護者からは、「パッと見で、見たん感じが、健常者と見分けがつきにくいので、場面によっては、アレ？と感じられるかもしれない。」などの意見を聞いた、私も高等部の生徒さんとの交流（挨拶運動）も行って、どのようなことが必要であるかを考えるヒントを頂きました。

基本的なことがまずできるようにしようと、コミュニケーションがなかなか取りづらいので、ツールを作ることで役立てられないかと考えました。あまり、知的障害者との関わりが薄くても、対応ができることと、学校に通う生徒も受け入れやすい仕組みとして学校側と話し合いを数回持たせて頂くことで完成に繋がりました。

		ひなんじょでの、うけつけ 避難所に避難をしてきて、避難者名簿に記入をしてもらう又は名前を教えてもらう場合			
1		あいさつします	4		「じゅうしょ」をいいます
2		おはなしをききます	5		かいてみます
3	なまえ	「なまえ」をいいます	6		ありがとうございました

まずは、避難所での受付から始まり、食事の取り方までを一連の流れで提示しながら進められるようにしました。

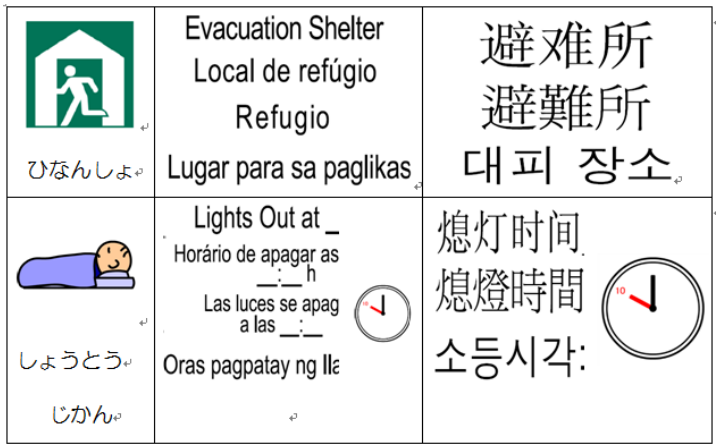
		しょくじのとりかた 避難所での食事のとり方について説明します。			
1		おさら、はしをようういしましょう	4		いただきます
2		ちいさいこからならびましょう	5		おさら・はしをかたづけます
3		はいぜんをうけます	6		はみがき

先生方からの指摘では、使い慣れたシンボルマークを利用することを薦められて、「ドロップス」という特別支援学校向けのイラストを多用することになりました。また、文面は、漢字が多く記載されていたのですが、障害児向けには、ひらがなを使用することが、「わかりやすい」とのことで、文面もひらがなの併記とすることになった。これらのツールの活用が今後望まれるとともに、改良をして利用されていくことも考えていきたい。

【多国籍向けツール開発に向けて】

日本が現在観光立国に向けて、外国人の訪問者を増加して行く取り組みとともに、オリンピックが開催されることも決まったうえでの、「おもてなし」も含めて、災害時の外国人向けの対応整備が始まることも考えられてきている。八千代市においては、総人口の２％が外国籍住民が居住している状況であった。また、当校でおいても既に通学児童においても数名がおり、子どもは日本に馴染んでいるが、大人はあまり社会に溶け込んでいないのも事実であるため、災害用のツールを先行した、災害時弱者児童向けにあわせて、避難所で使いやすいマークと多国籍語を併用した形で作成をしてみた。

実際の運用については、今年の八月に行われる、「防災キャンプ・色々な人との取り組みを作ろう（多方面との関わりを持つ）」において使用したいと考えている。その前段階としては、八千代市内で、比較的に外国籍の方々の集住地域である村上北小学校から意見を頂くことになった。これは、子どもたちの視線からの意見を聞くことで、子どもがわかれば、大人もわかると考えられるためである。学校での先生方の現場での意見は大変に参考になった。会話ができても、読み書きができない子もいることから、このようなマーク併記の有用性が証明される結果となったことと、漢字より、「ひらがな」での表記が望ましいこともわかった。



これらのことから、「マーク」「ひらがな」については、障害者・外国人にもやさしいという意味もあることが良くわかり、今後のこれらの基本的な要素を採用されることを望みます。

このような形から徐々にしていくことで、社会的なマークとの位置づけを今後地道に構築するとともに、公的にも世界標準のピクトグラムの作成があると便利であると認識している。

（自由記述：１／３）

（自由記述：２／３）

【防災キャンプフォーラム】

二年間に及ぶ、キャンプを行ったことで、避難所として想定される課題作りについては、当初の目標を達成はしたと考えている。今年の８月にも三度目の仕上げとなる、キャンプに向けて企画を考えているが、千葉県側より、「防災キャンプフォーラム」を開催したいとの協力要請があり、参加することで、私達の防災キャンプについて幅広くＰＲをする事に至った。

私達のテーマは、日常生活の延長で、取り組める企画作りとしてたものであって、千葉県では、自然の家を中心とした、インフラが全く利用できないという設定での取組でした。防災対策が求められている中では、県内でも本格的な防災への取組があまり進展していない状況であっても、一歩づつの前進があるかと思っています。

（自由記述：３／３）